

# セラミック アーカイブの可能性

The Possibility of Ceramics Archive

**Key-words** : Reproduction of cultural property and masterpiece by ceramic board "Otsuka Ohmi-Toban"

大杉 栄嗣

Eitsugu OSUGI (Otsuka Ohmi Ceramics Co., Ltd)

## 1. はじめに

当社の工場がある滋賀県信楽町は、2017年「きっと恋する六古窯」として日本遺産に認定された。中世以前に開かれた窯場が現在も生産活動を続けている古い「やきもの」の産地の一つである。当社は信楽焼として製造している訳ではないが、同様の天然材料を入手し幅900×高3000mm、厚み20mmの大型陶板を1/500mm程度の寸法誤差で製造するやきものづくりの会社である。焼成後、優れた耐久性を持つやきものは、その製造プロセスにおいて変形や割れ等想定外の結果が生まれやすい。特に色彩については焼成時の複雑な化学変化により発色させるため、多彩な色彩の絵画等を現物と同じにやきものに移すことは難しいとされてきた。

当社では創業時から大型陶板を活用するためこの色彩にもこだわり続けてきた。近年では陶板で再現する現物の持つ質感も少しずつ表現できるようになり、やきものの新しい可能性が見えてきた。さらに追求することで日本発の新しい文化価値を提供できると、日々工夫を重ね取り組んでいる。

## 2. 大型陶板の開発から夢の陶板美術館の実現

徳島県鳴門市を発祥の地とする大塚グループが建材用の大型タイルの開発に着手したのは1968年のことである。大量に出る吉野川の川砂を利用するために研究が重ねられ、歪みの少ない1m角程度の陶板が完成し、世界7カ国の製造特許も取得した。しかし釉薬の開発にはさらに時間が掛かることから、1970年共同研究の地として選ばれたのが「信楽」である。

製品は大型美術陶板として、公共空間等の装飾壁、大型建材として超高層ビルの外壁材や床材等、主に建築空間や屋外空間への活用を目指し事業が展開され、著名作家との作品づくり等も積極的に行ってきた(図1)。



図1 施工実績 (© 大塚オーミ陶業)



図2 大塚国際美術館 (© 大塚オーミ陶業)

「名画を陶板に焼き付ける」という発想は、ごく早い時期に陶板の活用方法の一つとして提案され、当時やきものでは珍しい4色製版による印刷技術の追求が始まった。当グループが75周年記念事業として陶板美術館を作るプロジェクトが決定し、1990年頃より本格的に西洋名画を陶板で複製再現することとなった。

1998年に開館した大塚国際美術館(図2)は延床面積8897坪、地下5階地上3階の日本有数の規模である。作品はすべて原寸大で1080点を超え、3つのユニークな展示方法で常設されている。

- ①環境展示 古代遺跡や教会等の壁画を環境空間ごとそのまま再現した今までにない臨場感を味わえる。
- ②系統展示 古代から現代に至るまでの西洋美術の変遷が美術史的に理解できる。
- ③テーマ展示 人間にとって根源的かつ普遍的主题等、時代を超えて古今の画家たちに描いた代表的な作品をテーマごとに展示する。

特に当美術館の特徴の一つである環境展示の製作は、まず現地の測量や詳細な原画データの取得(撮影)等に膨大な時間と労力を費やすこととなった。色彩の再現性についても基準とする色見本の設定が必要なことから、さまざまな資料を入手し、可能な限り現地に赴いて現物を確認しながら進めた。

一般に精密な色彩の再現を陶磁器で行うことは限界

があると前述したが、幸いにも当社が開発した陶板はその構造等から、耐熱性に優れた特性を持ち、繰り返し着彩と焼成することが可能であり、色彩の再現性を高めることができた。

すべての作品が陶板による複製であるため湿度温度の厳密な管理の必要がなく、各部屋で監視員の常駐も必要がない。照明も明るく、ガラスケースもなく、間近で観ることも・触れることもできる等、今までと全く違った鑑賞方法を提供して好評を得ている。年間40万人を超える入場者を迎え、黒字経営の数少ない美術館の一つである。

### 3. セラミックアーカイブの可能性 ©

2011年4月金沢大学フレスコ壁画研究センターに宮下孝晴センター長（当時）を訪ねた。40年にわたってイタリアのフレスコ壁画の調査研究をされてきた宮下先生は、文化遺産を後世に残すため、「現状」を高精細で劣化のないデジタルデータとしてスキャンして記録する「デジタルアーカイブ」の重要性とともに、経年劣化による退色や変色のほとんどない陶板による忠実な再現を「セラミックアーカイブ」と提唱された。

翌2012年1月29日、当美術館において「デジタルアーカイブとセラミックアーカイブの可能性」と題したパネルディスカッションが開催された。宮下先生が基調講演を行い、その後、筆者を含め4名が参加し白熱した議論が展開され、セラミックアーカイブの意義がより明確になった（図3）。参加者は文化庁文化財部美術学芸課長 栗原祐司氏、文化庁古墳壁画対策調査官 建石 徹氏、大塚国際美術館学芸副部長 平田雅男氏であった（役職は当時）。

当美術館の1000点を超える複製陶板製作は、セラミックアーカイブの基礎となる陶板を作る技術・技法の進歩に大きく貢献した。そのみならず作品や文化財と

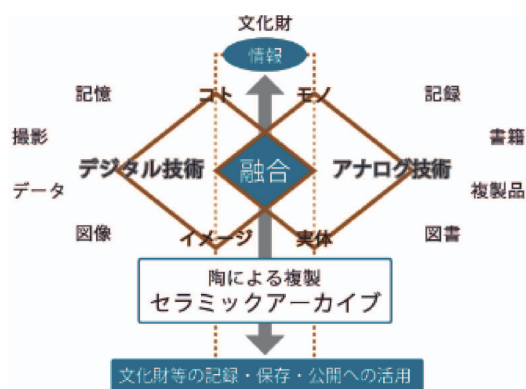


図3 セラミックアーカイブについて

どう向き合うかといった姿勢面、心の持ちようにもいろいろと影響を与えている。例えば単に作品の表面を観るだけでなく作者の意図や時代背景、描画手法の変遷等をも知り理解することで製作物のでき上がりが違ってくる、製作する技術者の作品への向き合う姿勢に影響を与えるということである。

それは2010年文化庁より依頼されたキトラ古墳壁画（2019年3月国宝指定）の発見当時の姿を陶板で再現する事業において大変役立った（図4）。壁画の再現は4名の製作監修者による検証と指導のもと進められたが、その他に修復者や助手等多くの人が信楽の工場を訪れ、当時の生々しい状態を思い起こして伝えてくださった。当社はそれをイメージし具現化するために試作を繰り返し、完成へと繋げて行った。表面の色彩や細かな凹凸、艶等の表層に表れている部分だけでなく、記録し伝えておきたいという多くの人の強い思いも、釉薬や素地とともに焼き付けることができたと考えている。実在するモノとして後々まで忠実に伝えることができる。これがセラミックアーカイブの本質だが、それを深く考えるきっかけとなったようである。

当社は現在3D計測で得られたデータを活用する取り組みを行っている。製作する複製品をより高精細にするためである。一例として新潟県十日町市出土の国宝火焰型土器1号の複製品は形・色調だけでなく重さ

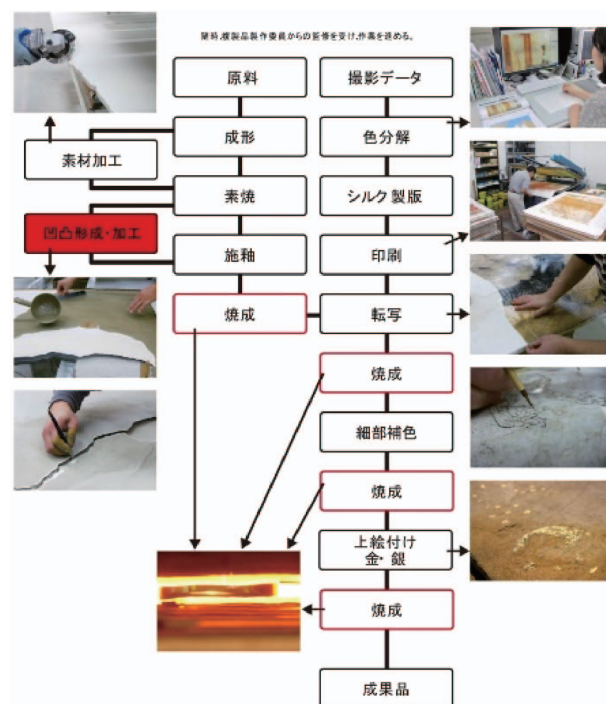


図4 キトラ古墳壁画 製造工程（© 大塚オーミ陶業）



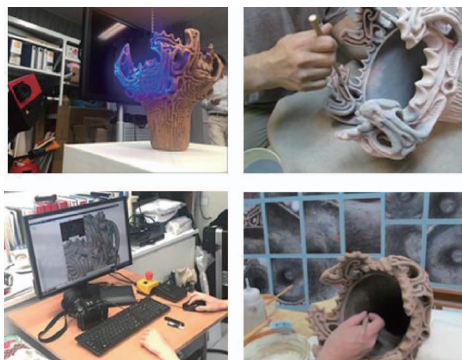


図5 立体物の複製

【左から】

火焰型土器：津南町出土

火焰型土器（国宝指定番号1）：十日町市出土

火焰土器（重要文化財）：長岡市出土

（© 大塚オーミ陶業）



グロッターリエの洞窟壁画（イタリア プーリア）

金沢大学の宮下先生が3D計測したデータを元に凹凸も忠実に再現した陶板

図6 グロッターリエの洞窟壁画（© 大塚オーミ陶業）

約16%前後収縮するが上手くコントロールしている。

また、壁画の再現においてもデータを直接陶板の表面に出力する方法を試作した。従来の色彩データに、凹凸データも付加することが可能となり、より資料性が高まると想定している（図6）。これらへの取り組みは奈良大学・東京藝術大学等とも連携し専門的な知



風神雷神図屏風（俵屋宗達）【国宝】  
1624年 江戸時代 京都・建仁寺蔵



図7 日本画の複製（© 大塚オーミ陶業）

見を提供いただいている。一連の取り組みが評価され、2018年に第7回ものづくり日本大賞内閣総理大臣賞の受賞へと繋がった。多くの方々の支援の賜と感謝している。

#### 4. おわりに

これまで述べてきたように当社では泰西名画や文化財等の陶への複製を通して「残し伝える」とこの大切さに着目してきた（図7）。今後も次の世代に残すべきもの、未来に伝えることにやきものがどう貢献できるか追求していきたい。さらにセラミックアーカイブの普及を通して、直接触れることで得られる感動の大きさや現物の興味を引き出す力の大きさを感じている。触れることができる、展示環境を選ばないというやきものの特性を生かす工夫により、健常者も障がいを持つ人たちも同じに楽しめ、心豊かな感性を育む場づくりへの貢献もできるのではと考えている。いずれにしても1000℃を超える高温で焼成され、数千年の耐久性を備えていることから、恥づかしくないモノづくりをしていかなければと気が引きしまる。

#### 筆者紹介

大杉 栄嗣（おおすぎ えいつぐ）

1978年京都産業大学経営学部経営学科卒業。  
1979年大塚オーミ陶業（株）入社、製造部、資材部、本社人事、総務部、2006年執行役員、2011年取締役（兼）常務執行役員営業部長等を経て、2012年代表取締役社長（兼）営業本部長 就任。

〔連絡先〕 〒520-0021 大阪市中央区大手通3-2-21 大塚オーミ陶業（株）

E-mail : Osugi.Eitsugu@otsuka.jp

